

わしかとりじんじや  
鷲香取神社

大字内牧字戸崎にある神社を、鷲香取神社という。鷲香取とは、鷲宮わしみやと香取神宮を合祀したもので珍らしい称号なので、その由来を調べた。

「新編武蔵風土記稿」には、鷲明神香取合社、村の鎮守なり、慶長十九年勸請と云う 南蔵院なんぞういん持なりと記されている。南蔵院とは、近世に当神社付近に構えた本山修験、幸手領不動院の配下にあつた寺院（現神官矢島氏宅?）。この寺院は明治初期の廃仏毀釈令により廃寺となっている。

御祭神は、経津主神ふつぬしのかみ（香取）天穗日命あめのほひのみこと（鷲）の合祀である。

当社の由来によると、仁和年間（八八五〜八八九年）のころよりこの地に香取神社が安置されていたと伝えられている。香取神社の由来について、下総国香取郡にある香取神宮の神馬が逸走してこの地に来たり、そのころはこの地方は、一帯が深山で人家も稀れ（この地域は昨年「一九七八年」、学術調査で発掘した内牧古墳群の付近であり、古墳時代、またはそれより以前の縄文時代：付近には縄文時代の集落遺跡もある…から人が居住していたことが推定される）であった。この山中に馬のいななきがしばしば聞こえてくるので、人々が山中に入り馬を発見した。神馬の行方を尋ねている人がこれを聞きこの地へ来ての話で香取神宮より逸走した神馬であることを知り、人々はこの馬を神宮へ返した。

このような縁故から、神宮に願い出て御分霊ごぶんれいを受けて内牧村総鎮守と称して祭祀したと伝えられている。

その後、中世前期の鎌倉時代、由来によると建久二年とあるが、史料を調査したところ建久四年（一一九三年）十一月十七日、太田庄、鷺宮の御宝前に血流る。凶怪たるの由云々、すなわち卜筮するの<sup>ほくせい</sup>ところ、兵革の兆と云々（吾妻鑑）とあり、十八日に源頼朝に知らせたので、十九日源頼朝は神馬鹿毛を鷺宮に奉らる。また社壇を莊嚴すべき旨、仰せ下さる。榛名四郎重朝御使たりと云々（吾妻鑑）とある。源頼朝から鷺宮に奉納された神馬が、この神社の前の道（広報かすかべ五二年一月号 歴史余話 “鎌倉街道” を参照）を通過する際に休まれた処がこの神社であった。

この時代の内牧村は太田庄に属していた。鷺宮は太田庄の鎮守（式内社といって非常に古い社である）で年々おみこしの渡御も行なわれて、殊に当神社に休泊する例もあったところから、氏子一同が鷺宮の御分霊を迎えることを願い出て香取神社と合殿し、鷺香取社と称したと伝えられている。

「新編武蔵風土記稿」に慶長十九年勸請と云うとあるが、神社の由来によるとこれは神社の再建された年である。社殿の再建修築についての経過は慶長十九年甲寅<sup>きのえとら</sup>三月十五日（一六一四年）田口筑後守と称する郷土他の諸士・氏子等と相謀りて本殿・拝殿を再建す 明治十七年六月本殿を再建す 明治四十一年七月拝殿を再建す とある。大祭は、七月十八日。

初出「広報かすかべ 昭和五十三年十月」かすかべの歴史余話